

GCC 諸国の王家・首長家（第1回） ドバイ・マクトゥーム家

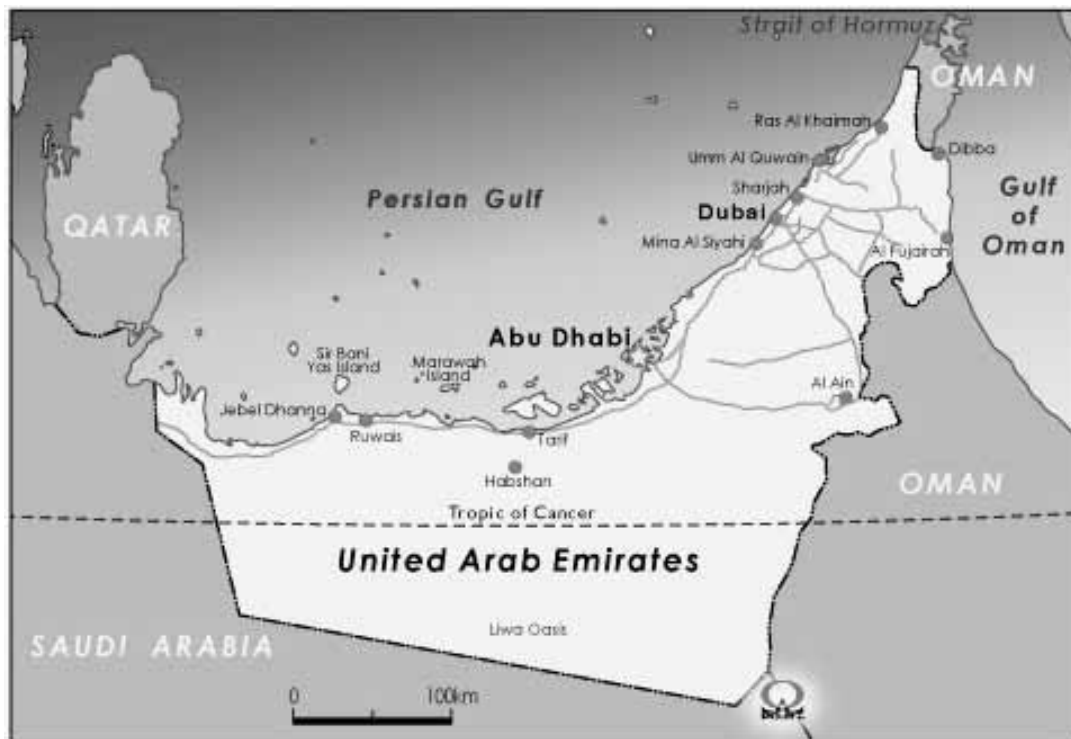
中東問題専門家

前田 高行

1. マクトゥーム家の歴史

アラブ首長国連邦（UAE）の一つであるドバイ首長国はマクトゥーム家が支配する首長国である。マクトゥーム家は元々アブダビに住んでいたが、1833年、当時の家長シェイク・マクトゥーム・ビン・ブティが総勢800人の仲間を率いて、アブダビから北東140kmにある入り江のドバイに移住し、現在のドバイ首長国を興した（地図参照）。

マクトゥームの次男ラーシド第4代首長（在位1886～1894年）の時代に、ドバイはアブダビ、シャルジャなど周辺の土侯国と共に英国と「排他的な条約関係」を結んだ。これによって首長たちは英国による保護と引き換えに、英国以外の他の外国政府とはいかなる関係も持たないことを義務付けられたのである。



19世紀から20世紀前半までのドバイの主要産業は、アラビア湾の交易と天然真珠の採取であった。しかし19世紀後半、スエズ運河が開通したことによりアラビア湾の海運は衰退し、また天然真珠も20世紀はじめには日本の養殖真珠に取って代わられた。

ドバイに転機が訪れたのはラーシド第8代首長（ムハンマド現首長の父親、在位：1958～1990年）の時代である。アブダビの石油発見及び商業生産開始に引き続き、1966年にはドバイでも石油が発見され、その後の二度の石油ショック（1973年及び1979年）により、ドバイは石油ブームの恩恵を蒙った。しかしドバイの石油は隣国アブダビと異なり急速に枯渇する運命であった。

このため石油枯渇後に備え、ラーシド首長は、クウェートからの借款によりクreek（入り江）を浚渫し、地域の物流拠点としてのインフラ整備を進め、さらにはドバイ国際空港、ジュベル・アリ自由貿易特区（JAFZA）を開設した。これによりドバイはアラビア（ペルシャ）湾一帯にとどまらず、中央アジアからアフリカ東海岸までの物流拠点としての地位を確立し、今日の繁栄の基礎を築いたのである。

なお同首長の時代の1971年には、アブダビ及び他の5つの首長国と共に7ヵ国によるアラブ首長国連邦（UAE）が結成された。アブダビのザイド首長（当時）が連邦大統領となり、副大統領にはラーシド・ドバイ首長、また首相にはラーシドの長男マクトゥーム・ドバイ皇太子がそれぞれ就任した。以来、連邦大統領にアブダビ首長、副大統領にはドバイ首長が就任することが慣例となり、現在の連邦大統領はカーリーファ・アブダビ首長（ザイド前首長長男）、副大統領はムハンマド・ドバイ首長である。なおムハンマドは連邦政府首相も兼務している。

UAEは連邦という政体をとっているが、経済及び内政面では各首長国に大幅な権限が与えられている。石油が豊かで人口、経済規模とも圧倒的なアブダビがUAEの屋台骨を支えているため、それ以外の首長国とりわけドバイは自らの国造りに専念することが可能となり、ラーシド首長は経済発展に焦点を当てて大胆な政策を推し進めたのである。

ラーシド第8代首長は1990年に80歳で亡くなり、長男マクトゥームが第9代首長に即位した。このとき彼は連邦政府における肩書も踏襲したため、副大統領と首相を兼務することとなった。マクトゥームにはハムダン（1945年生）、ムハンマド（1949年生）及びアハマド（1950年生）の3人の弟がある。マクトゥーム首長は即位当時47歳であったが、父親の前首長の路線を踏襲してドバイの経済発展を更に押し進めた。しかし彼は2006年に旅行先のオーストラリアで急死し、ムハンマドが第10代の首長に即位して現在に至っている。

2．現代のマクトゥーム家（家系図参照）

ムハンマド現首長（写真）は第8代ラーシド首長の三男として1949年に生まれた。ラーシドの4人の息子はすべて母親が同じであるが、これは湾岸の王家（首長家）では珍しいことなのである。と言うのは例えばアブダビの場合、ザイド前首長は6人の王妃との間に19人の男子をもうけており、カーリーファ首長はその長男であるが、同母の兄弟は無く、次弟のムハンマド皇太子以下は異母兄弟、といった具合である。サウジアラビアのサウド家も同様で、初代国王は26人の王妃を娶り、王子36人が生まれている。カタール、クウェー



トの各首長家も同じような状況である。

母親の異なる兄弟が多い場合、時として内紛の種になるが、この点で同母兄弟だけのマクトゥーム家は兄弟間の結束も堅く、また意思決定が迅速である。ドバイが急速な発展を遂げた要因には、ラーシド前首長の先見の明に加え、彼の息子達の結束もあげることができよう。

ムハンマド現首長はドバイでの基礎教育を終えた後、英国に留学した。1971年に UAE 連邦が結成されると、長兄マクトゥーム首相のもとで国防大臣に任命された。因みに翌年発生した日航機ハイジャック事件に際しドバ

イ空港でハイジャック犯と交渉をしたのは彼である。4兄弟は、父親ラーシド首長を補佐して連邦政府或いはドバイ首長国の要職に就いたが、父親が壮健の間は競馬の馬主として名を馳せ現在でも兄弟の「ゴドルフィン・グループ」は各国に牧場を保有し、世界有数のブリーダー（サラブレッド生産者）として有名である。

1990年に父親が亡くなり、長兄のマクトゥームが第9代首長に即位すると、4兄弟はドバイの国政に本腰をいれるようになり、1995年にはムハンマドが皇太子に指名された。2006年にマクトゥーム首長が旅行先のオーストラリアで亡くなったため、ムハンマドは兄の跡を継いで第10代ドバイ首長及び UAE 連邦副大統領兼首相となり現在に至っている。

ムハンマド首長には7人の息子と10人の娘があり、最初のヒンディ王妃との間に生まれた息子がハムダン（1982年生、現皇太子）及びマクトゥーム（1983年生、現副首長）である。彼は2004年（皇太子時代）にヨルダン・アブダラー国王の異母妹であるハヤ王女を王妃に迎えている。湾岸の王家・首長家は同族結婚あるいは国内の有力部族と姻戚関係を結ぶケースが殆どであり、他国の王家・首長家との婚姻関係は全くといってよいほど無い。その点ではヨルダン王家と姻戚関係を結んだマクトゥーム家のケースは極めて珍しい。2人の間には昨年12月最初の子供（王女）が生まれている。

3. 政府系組織における首長家一族

マクトゥーム家の王族は UAE 連邦政府及びドバイ首長国の行政組織で重要なポストに就いている。しかしサウド家（サウジアラビア）、ナヒヤーン家（アブダビ）、サバーハ家（クウェート）、アル・サーニー家（カタール）、ハリーフ家（バーレーン）など近隣諸国の王家・首長家では王族が閣僚など多くの重要ポストを占めているのに比べて、マクトゥーム家王族の政府要職者の数は少ない。

その第一の理由は、石油収入に裏付けられたアブダビが UAE 連邦政府を支配していることである。事実アブダビのナヒヤーン家の王族が大統領以下7人の閣僚ポストを占めているのに対して、マクトゥーム家はムハンマド（副大統領兼首相）及び彼の実兄ハムダン

(財政相)の2人だけである。そして第二の理由としてマクトゥーム家の歴史そのものが比較的新しく本家・分家を含めた王族の絶対数の少ないことがあげられる。巷間王族数千人といわれるサウド家とはその点で大きく異なっている。そして第三の理由は兄弟が少ないことである。ムハンマド首長は長兄が亡くなっているため現在は3人兄弟である。これに比べてアブダビのカリーファ首長には母親の異なる18人の兄弟があり、またサウジアラビアのアブダッラー国王も36人兄弟である。

さらにマクトゥーム家に政府要職者が少ない理由としては、ドバイでは不動産開発、サービス産業などの民間部門が発達しており、マクトゥーム家の一族は民間企業の大要職ポスト(それは名目的な地位であることが少なくないであろうが)を得る機会に恵まれていることもあげられよう。バーレーンやクウェートなどでは民間部門は非王族の有力マーチャント・ファミリー(商業財閥)が牛耳っており、王族は必然的に行政ポストに集中することになる。その点でマクトゥーム家の王族は職業の選択肢が広いと考えられる。

ムハンマドの略歴は既に述べたが、兄のハムダン連邦財政相はムハンマドのドバイ首長即位時に副首長に指名されている。3男3女の父親。末弟のアハマドは連邦政府の中央コマンド司令官である。このほかドバイ政府及び政府系組織の大要職についているマクトゥーム家王族は次のとおりである。

- ・アハマド・ビン・サイド： 民間航空庁長官兼エミレーツ航空会長
(ムハンマド首長の叔父)
- ・ムハンマド・ビン・カリーファ：国土庁長官(ムハンマド首長の従兄弟)
- ・ハシュル・ビン・マクトゥーム：情報文化庁長官(故マクトゥーム前首長三男)

4. ドバイの政府系ファンドについて

アブダビに比べ石油資源の乏しいドバイはムハンマドの父ラーシドの時代から脱石油すなわち商業及びサービス産業の興隆につとめ、そのために国家の運営に民間企業の経営手法を取り入れた。それがムハンマド首長が「ドバイ株式会社のCEO」と呼ばれる所以である。ドバイは周辺の豊かな産油国のオイル・マネーを呼び込み近代的な物流基地(ジュベル・アリ自由貿易特区: JAFZA)、金融特区(DIFC)、観光施設(Palm Jumeirah 他)などを国内に整備し、さらには有利な投資先を求める近隣諸国の資金を吸い上げて欧米企業のM & Aを展開している。

ムハンマド首長はドバイをヒト、モノ、カネの一大集散地に仕立て上げようとし、少なくとも現在の段階では彼の意図は着実に実現されつつある。そのムハンマドが率いるのがドバイのSWF(政府系ファンド)と呼ばれるDubai Holding、Dubai World及びEmaar Propertiesである。

Dubai Holdingは2004年10月に設立され、商業活動グループ5部門及び投資グループ2部門で構成されており、従業員総数は3万2千人である。その傘下には40近い企業或いは開発プロジェクトが連なっている(ドバイ日本総領事館ホームページより)。代表的なものをあげれば、商業活動グループにはエミレーツ・タワーズ、ジュメイラ・ビーチ・ホテルな

ど各種ビジネス,レジャー施設の建設・運営,或いはドバイ・メディア・シティ,ドバイ・インターネット・シティなどの不動産開発プロジェクトがある。そして投資グループの Dubai International Capital (DIC)社は 欧州エア・バスの親会社 EADS など欧米一流企業の株式を所有しており,最近ではソニー株の取得やサブプライム問題で揺れる HSBC(香港上海銀行)に10億ドル投資するなど,総投資額は75億ドル程度といわれている。

Dubai World も Dubai Holding 同様30以上の企業群が港湾サービス,不動産開発,投資など多様な活動を行っている(ドバイ総領事館 HP 参照)。このうち港湾サービス部門は DP World 社が統括しているが,同社は2006年に英国の P & O を買収している。なおこの時,P & O 社が米国に所有していた6つの港湾施設は米国議会の反対により手放している。不動産開発分野の中核企業はナヒール社であり,同社はパーム・ジュメイラ,ザ・ワールドなど沖合い埋め立てによる大規模な別荘地分譲事業を手がけている。投資会社イスティスマールはスタンダード・アンド・チャータード銀行への2.7%の資本参加,米衣料品卸大手バーニーズの買収など総額150億ドルの投資事業を行っている。因みにバーニーズ買収で日本のファーストリテイリング(ユニクロ)社と M & A 合戦を繰り広げたのは同社である。

1997年に設立された Emaar Properties は3社の中で最も古く,またドバイ初の不動産企業である。同社は世界最高層ビルのブルジュ・ドバイを建設中であり,最近では上海の国営企業と中国国内の不動産開発事業について MOU を締結している。

このように3社の活動状況を併記すると,それぞれが重複した分野で事業活動を行っていることがわかる。3社はすべてムハンマド首長が絶対的な支配権を握っていることは言うまでもなく,首長の方針は当面の間3社を競わせることにあると考えられる。ただ今後も国内の不動産開発,海外の M & A 事業を拡充すれば,いずれ首長一人の手に負えないほど組織が肥大化する恐れもある。そのような中でドバイ・ワールド傘下のナヒール社とイスティスマール社を合併させるという報道に見られるように事業の集約を図る動きもある。

またこれまでドバイとアブダビはそれぞれ別々に SWF を運営してきたが,昨年連邦政府の SWF として Emirates Investment Authority (EIA, 会長: マンスール連邦大統領相)が設立された。その目的と業務内容は未だ明確ではないが,EIA 設立にはドバイのムハンマド首長とアブダビのムハンマド皇太子(マンスール EIA 会長の長兄)の意向が働いていることは間違いなさそうである。因みに昨年アブダビの SWF である ADIA がサブプライム問題で揺れるシティ・グループの株式を取得した時,ムハンマド・ドバイ首長との緊密な関係プレーがあったと言われている。EIA は今後アブダビの資金力とドバイの運用ノウハウを一体化した政府系ファンドとして機能する可能性を秘めている。

5. 後継者問題

2006年1月に第10代ドバイ首長となったムハンマドは現在58歳の働き盛りである。健康に恵まれておりムハンマド体制は当分続くものと思われる。彼は首長即位後次兄のハムダンを副首長に指名したが,皇太子は2年余の間空席のままであった。そして今年(2008年)2月に勅令を公布し,次男ハムダンを皇太子に指名,また三男マクトゥームを次兄ハムダ

ンと同列の副首長に任命した。

彼が2年もの間、皇太子を指名しなかったのは、彼自身が皇太子に指名された経緯と酷似している。即ち1990年に長兄のマクトゥームが第9代首長に即位したが、このときも皇太子は暫く空位とされ、ムハンマドが皇太子に指名されたのは5年後の1995年のことであった。マクトゥーム前首長が次弟ハムダンがいるにもかかわらず、二番目の弟ムハンマドを皇太子に指名した理由は定かではない。多分自分の息子達がまだ幼く、また3人の弟の中でムハンマドが皇太子として最も相応しいと考えたからであろう。

君主制を維持している現代の国家は日本、英国などのような象徴的君主制も含め、長男が継承する所謂男系長子相続制が一般的である。マクトゥーム家の場合も第7代首長（現首長の祖父）以後3代にわたり長男が首長を継承している。従って前首長が生前に皇太子を弟のムハンマドから長男のサイドに代える選択肢は残されていたはずである。このような皇太子の交替は実は珍しいことではなく、ヨルダンでフセイン前国王が亡くなる直前に皇太子を弟のハッサン王子から長男のアブダラー（現国王）に交替させたような例もある。しかしマクトゥーム前首長はそのような手を打つことなく2006年に63歳で急死したため、ムハンマド皇太子（当時）が新首長に即位したのである。

このような経緯もあり、ムハンマドは実兄ハムダン或いは長兄の子供達に配慮して即位後しばらく新皇太子を指名しなかったものと思われる。しかしこのまま皇太子の空位を放置すれば、万一の場合を含め今後後継者問題で一族の間に混乱を生じる恐れがある。そこでムハンマドは名実共にドバイ首長として支配権を確立した現在を見計らって、26歳の次男ハムダンを皇太子に指名したのである。

マクトゥーム家の次世代への継承は比較的スムーズに行われるものと思われる。サウジアラビアのサウド家或いはアブダビのナヒヤーン家は異母兄弟の人数が多く（サウド家36人、ナヒヤーン家19人）、サウド家の場合第2代サウド国王以下第6代のアブダラー現国王まで兄弟が年齢順に王位を継承してきた（王位継承権を自ら放棄した年長の王子を除く）。その結果、サウジアラビア国王は高齢化する一方、誰の息子を次期国王（または皇太子）にするかという次世代へのバトンタッチが難問となっている。アブダビもいずれそのような問題に直面する可能性がある。その点でドバイは早目に手を打ったと言え、ムハンマドの決断はまさにドバイのCEOと言われ合理的で長期的なビジョンを持った彼の真骨頂を示すものと言えるかもしれない。

2008年5月現在

ドバイ・マクトゥーム家家系図（サイド第7代首長以降）

サイド	ラーシド	マクトゥーム	サイド
第7代首長 在位1912-1958	第8代首長 在位1958-1990	第9代首長（1990-2006） 1943生，2006.1死去	ラーシド ハシユル(情報文化庁長官)
		ハムダン	ラーシド
		副首長兼UAE連邦財政相 1945生	サイド マクトゥーム
		ムハンマド	
		第10代首長(2006.1-)，連邦副大統領兼首相，1949生	
		ヒンディ王妃 1979結婚	ハムダン皇太子(1982生) マクトゥーム 副首長(1983生)
		ハヤ王妃 2004.4結婚，ヨルダン・アブダッラー国王義妹	(2007.12 女兒誕生)
		アハマド	
		連邦中央コマンド司令官，1950生。	
		カリーファ	ムハンマド(国土庁長官)
	マリア（故マクトゥーム第9代首長の妻）		
	アハマド（1958生，ドバイ民間航空庁長官兼エミレーツ航空会長）		